

一般社団法人日本関係人口協会理事

指出一正 さん

ともに学び、ともにつながる
関係人口づくりを

聞き手 本誌編集部



大義名分は「関与することが楽しい」

近年、国や多くの地方自治体や地域づくりに関心のある方々の間で、「関係人口」という言葉をよく耳にするようになりました。「地域の活性化のために関係人口を創出しよう、活用しよう」といった文脈で語られることが多いかと思います。関係人口の定義を聞かれることも増えました。しかし、僕は「地域と関わることを楽しむ人」というあいまいな感じで捉えています。明確な定義づけを行なってしまうと、そこか

らはみ出すものを排除してしまい、言葉としての伸びしろがなくなる可能性があります。むしろ「自分自身で関係をみつけてください」ぐらいの余白を残しておくことが大事だと考えています。

僕は、関係人口の起点を二〇〇四年の新潟県中越地震(※1)だととらえています。それこそ最初は避難生活をされている方々に対する支援やガレキ処理など、復旧・復興のためのボランティア的な関わりから始まるのですが、参加した人は、そこで初めて(崩れてはいるものの)美しい棚田をみたり、地域の

方々の暮らしや言葉にふれるなど貴重な経験をしました。逆に被災地の方々にしても、外部からのさまざまな人々と接するきっかけになったと思います。新潟県の長岡市の中山間地域や山古志村（当時、現長岡市）といったローカルな地域で生まれた関係性が、その後、現在まで続く地域づくりに活かされていることは、関係人口を考える上でとても重要なことだと考えています。

これから地域づくりは、地震や大雨など災害とセットになつて考えざるを得ません。災害自体は歓迎すべきものではありませんが、仮に被災した場合でも地元と外の人間がお互いに関与していくことで、生きる張り合いや喜びにつながっていくのではないかと思います。「関与することが楽しい」というのは、関係人口にとっての大義名分です。行く人間だけでなく、迎え入れる人間も関与する——。相手がいるところに関係人口の良さや楽しさがあります。最近、東京に住む若者の多くが、誰かが反応してくれることに飢えているんだなと感じることがあります。都会は人が多いけど、じつは多ければ多いほど関与は減っていくのだと思います。

地域の人々との出会える場

僕は、大学時代に山岳系のサークルに入っていて、山登り

やキャンプなどを楽しみました。離島へもよく行き、年末は東京の三宅島や八丈島へ渡り、釣りをしたり、仲間とテントを張って島寿司を食べながら島酒を飲んだりしていた思い出があります。

じつは、僕が島の面白さに目覚めた理由の一つが、大学一年生の時に初めて行つた新潟県の粟島です。先輩たちが誘ってくれたのですが、佐渡島は知っていても粟島のことはまったく知りませんでした。当時、先輩たちの間では椎名誠さんが流行つていて、『あやしい探検隊』シリーズ（※2）にも登場する粟島を旅先として選んだのだと思います。村上市の岩船港からフェリーで渡り、一週間ぐらい滞在しました。

島では、港のある内浦地区にテントを張り、峠を越えて釜

指出 一正（さして かずまさ）

一般社団法人日本関係人口協会理事、雑誌『ソトコト』総編集長。1969年群馬県生まれ。雑誌『Outdoor』編集部、『Rod and Reel』編集長を経て、現職。30余年にわたり全国各地の現場を取材した知見をもとに、ローカルエリアの魅力や可能性を発掘。関係人口の提唱者としても知られる。国や地方自治体の有識者会議の委員や講師を担うなど、地域のプロジェクトに多く携わる。著書に『ぼくらは地方で幸せを見つける』（ポプラ新書）。趣味はフライフィッシング。



雑誌『ソトコト』の関係人口関連の特集号（右）と最新号（左）。



粟島と岩船を結ぶフェリー「ニューあわしま」。

谷地区の海へ遊びに行くという毎日を過ごしていました。ある日、釜谷のご高齢のお母さんが「あんたたちが港の方でキャンプをしてる学生か？」と声を掛けてきたので、いろいろとおしゃべりをしました。僕たちの行動が島の方々に筒抜けになっていることに驚きましたが、別れ際に「あんたら、スゴいね」と粟島のお酒をくれたことに感動し、粟島のことが大好きになりました。翌年も行くようになり、後輩たちにも必ず勧めるようになり、さらに後輩たちから後輩たちへ……と、(当時は言葉もなかったのですが)関係人口の広がりを感じた初めての場所かもしれません。今では仕事などもあり、なかなか粟島へは渡れませんが、関川村や小国町などを訪問する際に少し時間があると、岩船港の辺りまで行って粟島を思いながら釣りをしたりしています(笑)。

僕がなぜ、粟島のことを好きになり、自ら関係人口として島をPRするようになったのか。それはフレンドリーに声を掛けてくれ、お酒までくれた釜谷のお母さんの存在なのだと思います。東京で暮らす若者にとって、島の方に温かく迎え入れていただいたことは、とても新鮮な出来事でした。

関係人口を一言でいうと「地域に関わりたいたい」と思っている場所から来る人たち」になるかと思っています。そんな彼らが「一度行ったのもう十分です」と終了することなく、地域に滞留したり、回遊していくようなことが起きていくことが望

ましののだとしたら、僕の例えでいうと、広報とか総務担当のように「いつも出てくるキーパーソンとは違う人たちと出会えるきっかけ」があった方が、その地域との関係性をより自分のものにしやすいはずだ。

旅先で自分からいろいろな人に話し掛けられる性格なら良いですが、やはり慣れない場所では気後れするものではないでしょうか。そういった点を踏まえると、誰に対しても地元の人と出会う機会を提供できるような場所、観光案内所ではなく「関係案内所」があって、観光案内人ではなく「関係案内人」がいることが大事なのだと思います。

関係案内所と関係案内人

僕の勝手なイメージですが、地域コミュニティが強い島の観光案内所は、かなり関係案内所に近い存在なんじゃないかと感じます。ただ、人と人が出会いつながる場所が関係案内所であるとすれば、それはゲストハウスでもカフェでも公民館でも構わないのだと思います。粟島でいうと、かつて青柳花子さんがつくったゲストハウス「おむすびのいえ」もそれに近かったのかもしれない。関係案内所は、地域の人にとっては多少アウェイ感があつて、外から来る人にとっては少しホーム感があつて、両者の間をUターンしてきたオー

ナーが結んでいるような、どことなくソ、ワ、ソ、ワした雰囲気があつた方が、みんなが対等に出会える場として機能するようない感じがしています。また、未来永劫同じ場所にある必要はなく、ある一定期間そこにあつて、時間とともに違う場所へ移ったり、違う形の関係案内所に変容しても良いと思います。

関係案内人は、非常に属人的なものです。例えば、おせっかいが好きであるとか、人脈が異常に広く世話好きなど、その島のキーパーソンやハブになっているような人ならどんな人でも構いません。区長でも、民生委員でも、地域おこし協力隊でも、性別・年齢・職業は問わず、人と人を上手く結べる第三者的な人がいることが大事だと思います。

また、関係案内所と案内人がセットである必要もありません。関係案内人がやっている関係案内所もあるし、それぞれ個別に動いている場合もある。要はその地域へ行く人間にとって、心の拠り所というか頼りになる人がその島にいてくれることが、関係人口の創出、維持、拡大のポイントになると考えています。

自治体職員の大いなる可能性

そういう意味でいうと、僕は、自治体の職員が背広を脱ぎ、普段の業務外の時間を過ごすようなラフな形で観光客などに

接することができれば、関係案内人として無敵な存在になれると思っています。相談をしやすい、まちや地域の仕組みを知っている、キーパーソンとも面識がある、しかも客観的な視点を持っていて、公務員という地元の人も外の人にとっても安心感のある人材は、行政の人間において他にいません。まさに全天候型の関係案内人です(笑)。ぜひそのことを自覚し、誇りに思っていたきたいです。

自治体の方は、自分の担当や部署を超えて活動することに、越権行為のような後ろめたさや、やりづらさを感じることがあるようです。そこで、地域の小さなイベントや、集落の行事など当たり障りのないところで「ビールの栓を抜く係」くらいのゆるい役割から始めて、少しずつその役割の幅を広げていけばどうでしょうか。必ずしも深く関わる必要はありません。浅くてもいろいろな人・場所に顔が効くような、関係案内人的に活躍される行政の方が増えていくと嬉しいです。

関係人口をシェアする

最近、僕が面白いと感じている島は、利尻島と沖永良部島です。これは利尻島の交流拠点の「ツギノバ」と、沖永良部島のコミュニティスペースの「エンタク」という、いわば各島の関係案内所を中心とした「関係人口のシェア」のような



利尻町定住移住センター「ツギノバ」。黒板には町の求人とともに沖永良部島の求人情報も掲載されている。

取り組みで、北と南の気候の違いや労働需要のズレを活かした「人材のシェア」と言い換えてもいいかも知れません。夏は涼しい利尻で観光のバイトをしながら過ごし、冬は暖かい沖永良部で農業を手伝いながらケービングをして暮らす的な働き方を関係案内所が提案することで、多拠点居住など新しいライフスタイルを志向する若い世代のニーズと、シーズンの仕事の波を組み合わせて平準化させたい島側のニーズの双方に応えうる興味深い試みだと思っています。

日本には一定層の離島好きの若者がいて、彼らは往々にして単なる観光では飽き足らず、その島や地域の方々と一緒になつて何かに取り組みたいという気持ちを持っています。そこをどうサポートしていけるのが、関係人口を深化させるカギになる気がします。つまり、農業の季節的なアルバイトは、DXが進んでいるのすぐにマッチングができると思いますし、実際にできています。しかし、その人がどんな思いでその島に来て、仕事以外の時間をどのように過ごしているのか、アルバイト期間が終わり島を離れたあとは何をしているのか、といったところまではまだ見えていません。そこまで見えないからこそ居心地が良い、という意見もあるかと思いますが、単発の関係に終わらせることなく、関係人口としてつながり続けられるようにしていくためのケアも必要です。

関係人口を呼ぶ「やわらかいインフラ」

島根県は「過疎」という言葉が現れた場所です。過疎発祥の地で実践されている地域づくりには、オリジナリティがあります。自分たちの地域の特長や課題としっかり対峙した上で施策を行なっている自治体が多いです。それこそ、海士町は先進地として有名です。隠岐島前おきとうぜんといえは海士町、といった感じで島前地域全体のイメージを海士町が牽引しているような感覚はありますが、近年は西ノ島町や知夫村ちふむらでもまちづくりに対する高い意識を持つ島内外の人材が増えています。彼らがこれからどんなことに取り組んでいくのか、とても楽しみにしています。

僕は、久米島町アドバイザーを務めていたこともあり、久米島にはとても思い入れがあります。地域づくりコーディネーターなどで活躍されている石坂達さんとくさや島で初めてのクラフトビール醸造所「ブルワリーツムギ」を立ち上げた島袋陽子さんなど、頼もしい関係案内所・案内人が現れてきており、注目しています。

若い関係人口や交流人口が増えている地域をみると、行政の厚い移住政策や子育て支援策はもちろんですが、若者たちが「ここなら楽しく過ごせそうだ」と感じる、もつと軽やかな「やわらかいインフラ」のようなものが共通して存在して

いるように思います。僕なりに「やわらかいインフラ」を解釈すると、「おいしいコーヒー」「バチバチのWi-Fi環境」「同世代の仲間」「おしゃれな本屋」「盛り上がるブルワリー」「強い勝手のいいコワーキングスペース」そして「最高のパン」があげられます。もちろん、そのすべてが揃っている必要はないし、パンが寿司に代わっても構いませんが、久米島には「やわらかいインフラ」がある程度整っていて、僕自身が関係人口として応援したくなります（笑）。

オンラインで地域に作用する

日本全国の関係人口に接するなかで感じているのは「関係人口の分化」です。大きく「①地域内」「②流域」「③オンライン」関係人口に分けることができると考えています。

①は、首都圏から人を呼び寄せることも大事だけど、同じエリア（例えば同じ県内の県庁所在地など）に大きな人口のポリウムゾーンがあれば、その都市との関係を構築していいというものです。例えば、利尻島であれば東京ではなく、同じ北海道地域内の札幌をターゲットにして関係人口を強化するという考え方です。

②は、地域を都道府県などでみるのではなく、川や海、植生などのような流域の視点でとらえ、その関係人口を強化

していくという考え方です。僕は都道府県のような区分よりも、むしろ流域関係人口の方が親和性が高いように感じます。③は、コロナ過で急速に発展した関係人口だと思います。オンライン上で人と人、人と地域がつながっていくので、非常に参加のハードルが低いことに加え、地域に足を運ぶことはできなくてもその土地のことを思っている人、関わりを持ちたいと考えている人など、大勢の隠れた関係人口を掬うことができます。

また、既に関係性を築いた方々とのつながりを深めたり、関係人口にまちづくりに参画してもらうためにもデジタル技術は有用です。新潟県中越地震を契機に関係人口による地域づくりが進んだ山古志村では、現在、NFT（※3）やDAO（※4）を使ってデジタル村民をつくり、ディスコード（※5）上で会議を行ないながら、デジタル村民の声をリアルなまちづくりに反映させていくとするプロジェクトを進めており、多くの方の関心を集めています。

最近ではいろいろな地域でDAOのような取り組みが摸索されていますが、このような動きに対する反発も生じるため、なかなか進展していないのが実情です。山古志がそれらと異なるのは、二〇年間にわたり関係人口の力をとり入れながら地域づくりを進めてきた下積みがあり、さらに自分たちの取り組みを進展させていく選択肢としてNFTやDAOを選ん

だという流れにあると思います。流行っているから始めよう、広く浅く誰が来てでもいい、という戦略ではありません。

関係人口の裾野を広げるために

僕はこれまでにいろいろな方から「関係人口の協会をつくりましょう」「法人化しましょう」などの提案をいただきました。しかし、そういった組織をいっさい作ってきませんでしたし、そういった組織に所属することありませんでした。そんななか二〇二四年五月に「一般社団法人日本関係人口協会（※6）」を設立し、理事に就任したのは、「これまで協会などに関わってこなかった分、逆に作ったらどうなるんだろう」という好奇心に似た理由（思い）からです。大きなアクションを起こすために協会を創設したわけではなく、これまで個人で関係人口を発信してもなかなかリーチしなかった人・層などに、協会から発信したら届くかもしれない、関係人口の裾野が広がるかもしれないと、考えた部分が大きいです。また、個人ではなく組織だからこそ公的な機関と対等に話すことができる場面もあるだろう、とも考えました。

協会の目指す活動のテーマは「リジエネラティブ（よりよく、再生させる）」です。勉強会や交流会などを通して、「ともに学び、ともにつながる」というスタンスがいいのではないかと

感じています。なので、いきなり「数百の組織・団体の会員を集めてやるぞ!」ではなく、私たちの感覚に興味のある組織・人たちと一緒にあって、実験的な部分を残しながら運営していこうと思っています。

まだ設立したばかりで具体的な取り組みや成果はこれからですが、ぜひ離島の自治体や離島振興に関わる団体の皆さんにご加入いただけると嬉しいです。ともにリジエネラティブな関係人口づくりを目指しましょう。

（令和六年八月一日、一般社団法人日本関係人口協会にて）

※1…二〇〇四年一月二三日に新潟県川口町（現長岡市）の直下を震源として発生した大地震。震源の深さ一二キロメートル、規模マグニチュード六・八、最大震度七を記録。

※2…作家の椎名誠を隊長として男ばかりの集団で合宿をする「あやしい探検隊」が、自然との原初的な出会いを求めて、思いつくまふ海・山・川へ気ままな旅をする人気エッセイシリーズ。

※3…非代替性トークン。ブロックチェーン上に記録される代替不可能なデータ単位。

※4…分散型自立組織。ブロックチェーン上で管理・運営される特定の代表者が存在しない組織。

※5…テキストやボイスチャットなどに対応するコミュニケーションサービス。



※6